

財務会計論 第1回 上級答練 講評

【出題論点】

第1問	問1	退職給付会計(計算)	第3問	問1	連結財務諸表(計算)
	問2	個別キャッシュ・フロー計算書(計算)		問2	退職給付会計(理論)
第2問	問1	減損会計(理論)		問3	ヘッジ会計(理論)
	問2	連結基礎概念(理論)			
	問3	純資産の表示・純利益(理論)			
	問4	税効果会計(理論)			

【平均点, 最高点, 合格点】

	第一問	第二問	第三問	合計
平均素点	30.6点	27.9点	24.2点	82.6点
最高素点	57点	57点	53点	153点
最高得点率	43.9点	56.2点	53.9点	144.4点
合格素点	30点	28点	24点	82点
合格得点率	29.7点	35.1点	34.9点	99.7点

※ 上記合格素点（第一問：30点，第二問：28点，第三問：24点，合計点82点）は，現時点における合格点を示している。仮に本問が論文式試験で出題された場合，合格素点は98点程度（第一問：36点，第二問：32点，第三問：30点）になると予想される。

【計算問題の総評】

計算の答練の返却を受け，答案を返却された時点で，自分が**AランクやBランク**といった得点しなければいけない論点でしっかりと点数が取れているのかを確認してもらいたい。計算科目は，取れる箇所を確実に取ることが重要であると常々伝えていると思う。だからこそ，普段の答練でとれるところを確実に得点することを目指してもらいたい。

その上で，そのような問題が『知識の漏れ』で失点してしまっている場合には，純粋に簿記の実力不足であるため，しっかりとテキストベースで復習を行ってもらいたい。また，単純なケアレスミス，時間配分のミス（Cランクに多くの時間を使ってしまったことも含む）等の原因で点数が伸びていない方は，次回以降の答練で同じミスをしないように，原因ごとに対策を講じるようにしてもらいたい。計算では，**必ず5割以上拾うという意識**を持って，答練に望んでほしい。

【理論問題の総評】

理論の答練の返却を受け，答案を返却された時点で，自分がどの論点で点数が取れていて，どの論点で失点しているかを必ず分析してほしい。つまり，**満点の点数と自分の点数を比較して，どの記述がよくなかったのか，次に同じ問題が出た場合に，どう記述すれば満点を取れるのか，必ず分析**してほしい。

また，分析をした上で「何故この点数なのか？」「どうしたら点数がもっとあがるのか」等，疑問に思う点があったら**講師やチューターに必ず質問**してほしい。採点をすると，受講生に伝えたいことや「こう書けばもっと点数が上がるのに」と思う点があるのでは非疑問点がある場合には講師，チューターに相談し，より一層のパワーアップを図ってほしい。

また，今回の問題では，最初の答練ということもあってか，解答欄を空欄にしている受講生が多かった。実際の論文式本試験では知らない論点であっても，**なんとか会計的に合理的なことを記述して部分点を取るという力も求められている**ため，たとえ知らない論点やあやふやな論点が出題されたとしても，解答欄を埋めるようにしてほしい。

今回は典型論点が多かったものの，初見の論点はもっと書きづらくなってくるため，今のうちから「**わからなくても何かしら搾り出して書く**」ということを心がけて答練を受けてほしい。

また，採点に当たって，様々な記号が書かれていたり，線が引っ張ってあったりすると思うが，それぞれは以下のような意味で使用しているので，各自，再度確認してほしい。

？ ×	その付近に書かれている文章が非論理的で、何を言っているのか財務諸表論の観点からわからない。
△	若干の誤りがある。ニュアンスがおかしい。
㊦ ㊧	文字が「○」で囲われているのは、字が間違っていることを示している。
~~~~~ (波線) 弱	文章において、重要なキーワードや理由が抜けている。文章自体に説得力がない。
_____ (直線)	採点において重要な言葉が入っている、もしくは表現がよい。

当面の目標は、「×」「?」「弱」の付けられない答案を作成することである。また、返却された自分の答案に「×」「△」「?」「弱」などが書かれていた場合には、必ずどの文章が会計的におかしいのか、しっかりと考えてほしい。「×」「△」「?」「弱」が付けられている理由がわからない場合には、必ず質問してきてほしい。

また、字の誤りも非常に多かった。特に以下の点に気をつけてほしい。今後は、誤字が多い答案は減点対象とする。

誤った表現	正しい表現
・正味売却価格，帳簿価格	・正味売却 <b>価額</b> ，帳簿 <b>価額</b>

さらに、キャッシュ・フローをC/F、貸借対照表や損益計算書をB/S、P/Lなどと記述している受講生も散見されたが、このような**略称での記述も今後は減点対象とする**し、解答欄以外の箇所に記述したり、1行の欄に字を小さくして2行で記述するなども減点対象とするので、注意してほしい。

## 【各問題の講評】

### 第1問 頭からすべて解きに行くのではなく、時間内に可能な限り拾いに行く意識を持つ

今回が初めての論文形式の答練となった方も多かったと思われるため、時間配分に失敗していると思われる答案が目立った(計算問題はかなり埋まっているが、理論問題に白紙が目立つ答案や、計算問題は埋まっていないが、理論問題はほとんど埋まっている答案など)。

論文式試験においても、今までの短答式試験と同様に「**問題を見極め、時間内に可能な限り拾う**」という意識を持つ必要があるため、この意識は欠かさないでほしい。そのため、問題を解く際には、頭からどんどん仕訳を切るのではなく、**最初に問題文を確認し、解答箇所及びその難易度を見極め、その上で、確実に点数が拾えそうな箇所から優先的に解く**ようにしてほしい(短答式試験の総合問題と解く手順はほぼ同じ、という風に考えてほしい)。

以下では、各解答項目の難易度を付しておくので、Aランク・Bランクの得点しなければいけない問題の正答率を分析してもらいたい。**Aランクは、正答可能性が高い(拾いたい問題)**、**Bランクは、正答可能性が中程度(半分程度得点したい問題)**、**Cランクは、正答可能性が低い(得点しなくて良い問題)**という意味である。本問では、現状では5割程度、本試験時には6割程度を目標にしてもらいたい。

問1(1)		(2)				(a)		(b)	
①	②	①	②	③	④	(a)	(b)		
A	A	B	B	B	B	B	B		

問2									
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
C	B	A	A	A	C	A	A	A	A
⑪	⑫								
C	A								

※ 難易度は本試験時における目安を示している。

## 第2問

**問1** (1-①) 「価格」と「価額」を混同しない

残存**価額**と書かなければならないところ、残存**価格**と書いてしまっている受講生が散見された。今後は**価格**と**価額**という言葉の使い分けに注意してほしい（イメージとして、価格：単価 価額：価値の総額と捉えてほしい）。

(1-③) **臨時償却について間違った理解をしている受講生が多い**

本問においては、臨時償却と減損処理とで、損益計算書に計上される損益の性質の違いについて問うている。ここでは本問において多かった間違いについて紹介する。まず本問において臨時償却が過年度の減価償却費の修正ということで、臨時償却費の計上区分が減価償却費と同じ販管費であるという記述が散見された。臨時償却費は特別損失に計上される項目なので注意してほしい。また、臨時償却は資産の物理的劣化（物質的減価）に起因するものであるとの記述も散見された。臨時償却はあくまでも**機能的減価に起因した損失**であるため注意してほしい。なお、臨時損失については物理的劣化に起因する損失である点も併せて確認してほしい。

(2) **問われていることを見極める力をつける**

本問は「事業用資産について、減損損失を認識するか否かの判定に関する基本的な考え方を、事業用資産と金融資産の違いに着目しつつ述べる」問題となっている。ここで、金融資産について、減損損失を認識するか否かの判定の考え方について述べている文章があった。これについては、正確に記述できているのであれば問題ないが、たとえば「時価が取得原価の50%以上下落した場合には、減損損失を認識する」と記述しても、これは金融商品のうち、売買目的有価証券を除く有価証券にしか該当しないことなので、説得力に欠ける。

また、金融資産について減損を認識する際に「時価と帳簿価額との差額を損失をして処理する」と言い切ってしまう受講生が非常に多かった。しかし、金融資産に時価が無いケースもある以上、このように言い切ってしまうのは印象は良くない。論文では会計的に正しいことを言わなければならないので、このような誤った文章を正しいかのように言い切ってしまうと、当然に減点対象となるので注意してほしい。

**問2** (1-①) **問われた事に対して、真っすぐに答える**

本問では、現行におけるのれんの計上範囲と連結基礎概念との関連性について問うている。ここで、記述する上で核となるのは「親会社が対価を支払った部分のみ(買入れのれん)を計上している ⇒ 親会社説と整合的」である。しかし「実務上、推定のれんを計上していない ⇒ 経済的単一体説と整合していない以上、親会社説と整合しているといえる」といった記述が多く見受けられた。確かにこれは間違った記述ではないが、問われていることに直接的に答えていないので、印象は悪くなってしまう。常に、問題に答える前に問題文をよく読み、問われているは一体何なのかをしっかりと考えた上で記述をすることを徹底してほしい。

(2) **我が国の連結財務諸表の作成方法と連結基礎概念の関連を適切に理解していない受講生が非常に多い**

まず、我が国の連結財務諸表は「親会社説」又は「経済的単一体説」の考え方に基づいていると誤って認識している受講生が非常に多かった。**我が国の連結財務諸表の連結基礎概念はいずれかの考え方に依拠している訳ではない。**

記述をする上でのテクニク的な話をすると、本問においては(1)で「親会社説」の考え方による会計処理が現行制度上、行われている点と「経済的単一体説」の考え方による会計処理が現行制度上、行われている点の双方が問われている。

その上で、(2)の内容が問われている以上、だからこそ、「どちらかの考え方に依拠している訳ではないと結論付ける」ことは可能である。

**問3** (2) **クリーン・サープラス関係の観点からの記述は説得力に欠ける**

本問では、純資産を株主資本とそれ以外に分ける理由を純利益を重視している点と関連させて記述させる問題となっている。ここで、「株主資本と純利益のクリーンサープラス関係を保持するために、株主資本と株主資本以外の部分を区分している」と記述している答案が見受けられた。確かにあなたが間違った記述とは言えないが、「株主資本と株主資本以外の部分を区分した結果、株主資本と純利益のクリーンサープラス関係が図れるようになった」のであって、当該関係を図りたいから、株主資本と株主資本以外の部分を区分したというわけではないため、説得力に欠けてしまうと感じた。

**問4 問われていることに答える意識を強く持つ**

本問においては、資産負債法と繰延法それぞれにおいて「適用される税率の違い」について問われている。この問いに対して過半数以上の受講生が、それぞれの方法で適用される税率について直接説明せず、「税率の変更後、どのような処理を行うかについてのみ記述していた。確かに、税率変更後に適用される税率や会計処理はそれぞれの方法で異なるのは事実ではある。

しかし、問われていることは「適用される税率の違い」を説明することである。

このため、仮に税率を変更した場合の処理が問われた場合には、「それぞれの方法が何を重視しているのかを説明 ⇒ そのため適用される税率が異なる点を説明 ⇒ その上で、税率変更後の処理を述べる」というステップが望ましかった（ただし本問では行数が少ない以上、ここまで記述することは困難といえる）。

**第3問**

**問題1**

以下では、各解答項目の難易度を付しておくので、Aランク・Bランクの得点しなければいけない問題の正答率を分析してもらいたい。**Aランクは、正答可能性が高い(拾いたい問題)、Bランクは、正答可能性が中程度(半分程度得点したい問題)、Cランクは、正答可能性が低い(得点しなくて良い問題)**という意味である。本問では、現状では4割程度、本試験時には5割程度を目標にしてもらいたい。

**問1**

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
B	A	B	B	A	A	B	C	A	B
⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		
A	A	B	A	A	C	A	B	A	

**問2**

A
---

※ 難易度は本試験時における目安を示している。

**問題2 (1)達成できないこと 単語一つで失点する可能性もある**

本問においてはまず、退職給付会計の目的を書けていない受講生が見受けられた。「達成できないことは何か？」と問われた際には是非とも先に「このような目的がある(あるべき論)」ということを書いた上で、それが「こういう理由で達成できていない」と記述すると、より説得力が増すと思う。

また、積立状況には「積立超過の場合」と「積立不足の場合」の2パターンがあるという点を意識してほしい。この点、「遅延認識すると、積立不足を適切に示せない」と記述すると少々足りない感じが出てしまう(なぜなら、遅延認識すると、積立超過についても適切に示さないにも関わらず、その点には触れていないからである)。正しい表現は、積立過不足もしくは積み立て状況であり、ちょっとした書き間違い失点するのは非常に勿体ないので気を付けてほしい。